

くまざさ

第50号
発行
釧路湖陵同窓会
くまざさ編集委員会
発行日
平成19年3月1日
印刷所
藤田印刷(株)

深まった学校と同窓会の絆 数馬田校長と栗林会長



写真説明～数馬田校長（左）と栗林会長

釧路湖陵高校の数馬田敏校長と釧路湖陵同窓会の栗林延次会長はともに湖陵17期、一昨年に数馬田校長が就任以来、学校と同窓会の距離がいつそう縮まりました。この3月、母校で退職を迎える数馬田校長と栗林会長に、この2年間の振り返るとともに、現役生、同窓生へのメッセージを語っていただきました。

高校時代、数馬田校長はバレーボール、栗林会長は剣道に汗を流していました。その後、数馬田校長は教職、栗林会長は会社経営の道へ進みました。数馬田校長は、「若い頃は、母校で教鞭を執ることに憧れを持っていました。が、行政や管理職に就いてからは、あきらめていました」と振り返ります。それが一転、初めての同窓生校長の誕生となったわけです。数馬田校長はその瞬間、「その（母校で勤務すること）ための30年間だったのかなあ」という気持ちだったそうです。

そして迎えた入学式。久しぶりの校歌に感激しました。それにも増して嬉しかったのは、同期の栗林会長が同窓会代表として出席したことでした。さらに、変わらない入学式の雰囲気、新入生たちが胸を張って誇らしげに帰っていく姿に、「これまでの高校にはなかったこと。生徒たちが釧路で一番の高校に入学した誇りを持っているのですね」と数馬田校長は顔をほころばせていました。しかし、その

反面、「他の高校には許されても、湖陵生には許されることがあります。それは先輩から受け継いだプライドであり、見えないことでもわかるのが湖陵生」、それだけに、地域からの期待も大きく、「プレッシャーはありました」と明かします。

校長室のドアは常に開け放たれ、また、毎朝登校してくる生徒全員に声をかけていました。それは「教師の一人として常に生徒の側（そば）にいたかった」からです。数馬田校長は生徒たちに、「当たり前前のごとを当たり前に。夢や目標を持つて努力しよう」と言い聞かせ、人づくりを徹底してきました。

一方、栗林会長は、「同窓会として学校に何ができるのだろうか」と考えていました。その結果、「たぐさんの先輩を輩出しているのだから、同窓生による講演会を開催しよう」ということに決まり実現しましたし、「これからも継続していきますよ」と話しています。

2人とも「ふるさと、母校を大事にすること先輩たちから教わりました」と口を揃えます。「同窓会と学校がいつそう良い関係となったので、これからも協力をしていきたい」と栗林会長は話し、数馬田校長も「開校100周年に向かって一丸となって頑張ってほしいですね」とエールを送っていました。

星 匠（湖陵30期）

目次

50号記念特集 2頁
釧路教職員湖陵会だより 3頁
「誠愛勇から」湖陵9期生の巻 4.5頁

総会・懇親会だより・出版案内... 6頁
釧路中学校林のナゾ 7頁
事務局だより・編集後記 8頁

「くまざさ」50号記念

同窓生と学校をつなぐ架け橋

釧路湖陵同窓会報「くまざさ」が今回で50号を迎えました。歴代編集委員の先輩たちが、筆を休めることなく同窓会の動きを伝えてきました。その原点を探ろうと思い、発刊当時（昭和55年4月）の同窓会長・組村真平さん（湖陵1期）、同窓会の幹事長で編集委員も務めていた遠藤隆吉さん（湖陵4期）にお話しをお伺いしました。（星 匠・湖陵30期）



創刊号
発行
同窓会
湖陵同窓会
発行日
昭和55年4月1日
組村真平同窓会会長
印刷所
米内印刷

私達執行部が諸賢の御ぼんを
受けて発行してから半端が経過し
た。昨年十一月開催された役員会
では執行部の若返りに伴う同窓会
活動の活性化が議論され、同窓会
館の建設・同窓会報の発行・若手
会員にも魅力ある会への脱皮、全
員手帳（在校生との接触強化
などが提案議決され推進は組織自
律的に任された。そして、
この全創刊号の発行が、その実
行の第一弾である。

中川久平元会長時代に一度全報
の発行が企画され第一号が出たとい
う話もあるが、もう二十数年も
前のことで現物も残っていないの
で、それは「幻の創刊号」と名付
け、敢えてこの会報を湖陵同窓会
報創刊号と発行させて頂くことと
した。

この会報が、それを通じて同窓
会がどのように動いているか、
各支部の動向はどうか、会員は会
をどのように見ているかなどを的
確に知るよすがとなり、同窓会が
会員のより身近な存在になる。



そういう役割を果たす会報であるこ
とを念じた。

創刊に当たり我が同窓会の益々の



市議会
活躍している
同窓生一覽

千業	三國	張江	羽田	小柏	清水	日向	本間	山口	中村	藤巻	總貫	野淵	市原
(12・3卒)	達郎	樹治	行雄	佐市	蘭	都雄	正直	功	隆	直樹	健輔	俊之	
	(18・3卒)	(28・3卒)	(13・3卒)	(23・3卒)	(26・3卒)	(19・10卒)	(33・3卒)	(19・3卒)	(27・3卒)	(40・3卒)	(30・3卒)		

― 横断線より上 ―

会報「くまざさ」
創刊の辞

同窓会長 組村真平

創刊号はB5版の8ページでした。1ページは、組村会長の「創刊の辞」が述べられています。同窓会役員の若返りとともに、活動の活性化が議論され、この際に、同窓会館の建設、若手会員にも魅力ある会への脱皮などが決まりました。その一つが会報の発刊でした。

記念すべき創刊号は、歴代の同窓会長による座談会でした。出席したのは、丹葉節郎さん（初代・創中8期）、米内富久司さん（3代・創中12期）、古谷武一さん（4代・創中13期）、坂下忠勝さん（6代・創中16期）、中村隆さん（7代・創中27期）、組村さん（8代）、それに、当時幹事長だった遠藤さん、カメラは「くまざさ」編集委員を長く務め、昨年5月に亡くなった上岡信明さん（創中30期）でした。

この座談会の中では、同窓会の歩みなどが語られました。最後に「今後の編集方針」が最後に話題となりました。会報には、同窓会の動



組村さん

勇 愛 誠

き、企業の同窓生巡り、地方支部の話題、同窓会当番期の紹介、湖陵高校の紹介などです。現在の「くまざさ」には、その言葉通りになっていることが多くあります。

現在は、札幌市で弁護士として多忙な日々を送っている組村さんは、「同窓会に関心を持ってもらうために何をすべきかを考えた結論が、会報の発刊と同窓会館でした」と当時を振り返ります。また、今後については、「同窓生ばかりでなく、在校生の活躍もぜひ会報に載せてほしい」と話していました。



遠藤さん

一方、創刊号の発刊に東奔西走した遠藤さんは、「組村さんはとても意欲的な会長さんで、『会報を作ろう』とすぐに行動に移しました」と懐かしそうに振り返っていました。まずは、上岡さんや住友昌さん（釧中31期）、組村さんの同期の徳田広さんをはじめ教職員湖陵会が中心となって編集作業を始めました。編集委員長は、同会の田村佳男さん（釧中26期）でした。その後、市役所湖陵会、組村さんの同期で前編集委員長の奥田達也さんらが加わり、発行も軌道に乗ってきました。

編集方針は、「同窓生が頑張ろう！北海道の湖陵高校ここにある」という気概を持って湖陵高校を応援することにありました。当初は、「3号まで続けば大丈夫だろう」と半信半疑で始まりましたが、現在は50号、遠藤さんは「感無量です」と顔をほころばせています。

幻の会報

創刊号の座談会に、気になる文章がありました。「中川久平会長時代に一度会報の発行が企画され第1号が：『幻の創刊号』と名付け・・・」。現物はありませんが、コピーは、くまざさ編集委員会事務局長の田巻恒利さん（湖陵18期）が持っていました。

「幻の創刊号」湖陵同窓会報は昭和34年7月23日に発行されていました。巻頭で中川久平会長（釧中1期）は、「本会同人諸君はこの趣旨に共鳴されられ萬事を放擲しても一度母校に帰った気持ちになつて後援してください」とあいさつしています。また、同窓会事務局長の米内富久司さんは、「同窓会館を作ろう」と呼びかけていました。

このほか、昭和28年に校舎が焼失してから新校舎が建設されるまでの経緯や当時の湖陵高校校長の住吉匡さん、校歌を作詞した本行寺住職で元釧中教諭の菅原覚也さんなど、多くの人たちの寄稿も掲載され、母校に対する期待を熱く語っていました。「くまざさ」の原点がすでに、48年前の「幻の創刊号」にあったわけです。



山田さんを招いての教職員湖陵会

釧路教職員 湖陵会だより

釧路教職員湖陵会（宝輪勝己会長）の研修会と懇親会が、昨年12月16日に釧路市内のアクアホールで開かれ、約40人が参加しました。

この日の講師は、前釧路市教育委員会教育長の山田和弘さん。山田さんは、湖陵13期で、市役所に勤務、2年前に教育長を最後に退職しました。その一方で、厚岸町内に山小屋「らんぶのいえ」を作り、NPO法人「根釧野外教育センター」を立ち上げました。また、末広歓楽街にある赤ちようちん横丁の再生に協力し、自ら空き店舗を「らんぶ」として開業しました。

演題は「酒とらんぶ」。山田さんは、夫婦で歩いて道ができ、山小屋で道が開けたことを述べ、その信条は「継続、実践、一燈照隅（らんぶ）」であることを披露していました。また、「すべては夫婦、人の出会い、酒の縁です」などとユーモアも交えてこれまで歩んできた「道」を話し、参加した会員たちは熱心に耳を傾けていました。

星 匠（湖陵30期）

誠愛勇から

湖陵9期生の巻

振り返えれば五十年 想い出すままに

湖陵九期

杉山 範雄
釧路市音別町尺別



光陰矢の如し。そんな言葉を
しみじみ味わっている。母校を卒
業して丁度五十年、本当に早いも
のである。想い出もそろそろ薄れ
かかってきたが、今振り返っても

う一度想い起して見たい。
伝統ある憧れの湖陵高校に合格
できたあの時の喜び、入学式の感
激だけは今もしっかり脳裡に焼き
ついている。



文化祭 スクエア・ダンス

市内から郡部から皆
それぞれのの思いを抱
いて湖陵への道を歩み
続けたのである。私は
云わゆる郡部(旧音別
村尺別炭砦中学)から
の入学組で仲間(10名)
も少なく入学時のクラ
スの中では市内組と仲
良くなるまでには確か
時間がかかったような
気がする。当時はまだ
純真であった。
しかし時間の経過と
共に気持も打ち解けそ
の後は楽しい学校生活
となった。
当時のクラスメート
と男女を問わず今尚
五十年に及ぶ友情の絆
が続いていると云うこ

とは湖陵高校で一緒に学んだお陰
といつも本当に思っている。
しかしそのクラスメートが東京
で、釧路で一人、二人と逝く話を
耳にすると本当に驚愕するばかり
である。

今、古希を前にして人生何回目
かの健康上の節目を迎え、今それ
を乗り越えなければならぬかと
も思ったりしている。

昭和29年(1954年)4月私
達が入学した時の教室は、前年2
月校舎が焼失してしまったので体
育館を間仕切りした粗末なもので
あった。確かベニヤで仕切りされ
ていて、薄暗く隣り教室の話しも
僅かに聞えたように記憶してい
る。そんな環境の中でも誰一人文
句も云わず勉強に励んだ姿勢は、
今になって考えて見ると大変素晴
しい事であったように思えてなら
ない。

今も行灯行列が伝統行事として
継続している事は嬉しいの一言に
尽きる。

しかし卒業後はなかなかチャン



級別演芸発表

スがなくて見たことがない。今度
是非見たいものである。行灯行列
は私達が3年生の時、昭和31年
(1956年)八月湖陵祭前夜祭
の一つの行事として初めて実施さ
れたと記録に残っている。

各クラス全員で知恵を出し合い
議論と試行錯誤を重ねながら出し
物を作り、プラカードを先頭にパ
レードした事が想い出される。

ただ私のクラスはどうゆう訳か
行灯行列に参加しなかった事は今
振り返っても残念であった。その

代り私は当時新聞局編
集委員の一員であった
ので記者気取りで、珍
しそうに行灯行列を見
入ってその感想を取材
し湖陵タイムスにその
記事を書いたものであ
った。

今、想い出しても市
民の皆さんは一樣に行
灯行列を好意的に見守
ってくれたような気が
する。五十年前にスタ
ートしたあの時の行灯
行列が母校の伝統行事
になって行く第一歩だ
ったすればこんな嬉し
いことは外にない。

我が9期は節目の年
に大々的に同期会を開
催して旧交を暖めている。又クラ
ス単位の集まりもそれぞれ頻繁に
行なわれているようである。

平成9年9月には卒業四十年を
迎えたのを機に阿寒湖温泉に52名
が久し振りに集まった。この時は
東京、札幌や各方面からも駆けつ
け夜遅くまで語り合ったことは云
うまでもない。今年は奇しくも卒
業五十年を迎えた。又皆さんで元
気な顔を合わせたいと思ってい
る。

東京方面の同期会は釧路湖陵高



平成9年9月 卒業40周年記念 同期会で母校を背に



平成18年10月 G組クラス会



海外シニアボランティアでブータンに向かう佐々木義修君を囲んで

校32同期会と称して18年間も続いたが寄る年には勝てず欠席者が年々多くなり今では都合の良い人だけが気軽に集まろうと云う事で、このほど名称を東京32同期懇親会と変更したとの事である。この方が長続きするかも知れない。私も以前は東京で出席の常連メンバーであった。

活躍している人、第二の職場で過去の経験を存分に発揮している人、趣味やボランティア活動に生きがいを見つけている人、或いは悠悠自適の人などが大多数である。一方、すっかり病院と仲良くなった人も少なくない等この長寿社会の中でさまざまな人生模様を見せている。

誰もが本場の「湖陵魂」を漂わせている様な感じがする。今尚、母校が良き伝統を長くしっかりと後輩へ、後輩へと受け継いできていることは、我が湖陵高校の評価をより一層世間へ高めしめるものであってこの上ない喜びである。

以上

平成18年度同窓会・懇親会だより

釧中・釧路湖陵同窓会が昨年8月12日に、釧路キャッスルホテルで開かれ、約500人の同窓生が参加しました。校歌斉唱、物故者へ黙祷が捧げられたあと、栗林延次会長が、「郷土のためにいっそう努力しましょう」、数馬田敏校長が、「文武両道の精神に沿って

生徒たちは、頑張っています」とあいさつをしました。このあと高本幸一幹事長から、5年後に開校100周年という節目を迎えることから、各期で名簿をまとめるなど協力をお願いします。今回の幹事は、湖陵24、34、44期です。懇親会では、現役生のチ

アリーダー、合唱部、吹奏楽部が、それぞれステージで披露を行いました。先輩たちから盛んな拍手を浴びていました。今年は25、35、45期が当番期です。まもなく始動すると思いますが、同窓生みなさまのご協力をお願いします。

星 匠（湖陵30期）



神成さん

一少年の十五年戦争

湖陵高校で昭和49年から同59年まで、現代国語などで教鞭をとっていましたが神成洋さん（札幌市内在住）が、昨年2月に「一少年の十五年戦争」（牧歌舎・東京都）を著しました。神成さんは、昭和6年に東京で生まれ、その後、旧満州で生活をし、終戦後、引き揚げました。同書では、多感な青春時代を送った満州での生活、やっとのことで引き揚げて帰国した様子をまとめていますが、その情景は目に浮かぶようです。神成さんは現在、戦後の体験を出版する予定で準備を進めています。同書の問い合わせは牧歌舎（072-785-7240）まで。



戦争体験を本に



釧中学校林のナゾ

いまもなお母校湖陵高校の校庭に在りし日の温容そのままの阿部与作2代目校長胸像は本校あるかぎり存在すべきものである。

熱田真吉初代校長と同じ教員養成の最高学府である東京高等師範を卒えられ教頭として赴任された。

そのころ釧路は火事が多かった。寄宿舎から門を出た坂下に教頭宅があった。近所が火事だとなつて釧中生が大勢集まつてきて荷は出す、畳や建具、茶碗の果てまで出してしまふ。押入れの棚まで出し、片づける段には大工さんをたのまねばならぬはめになった。

この調子で市内の火事のために生徒が手伝いにゆき頼もしがられもしたのである。

寄宿舎の大多数の生徒に肋膜炎が起きたときなど毎日の入浴や衣干し寝巻き取替えを實行させた。

生徒の面倒見の良さは奥さん共どもに熱心であつた。阿部与作校長が父兄からも慕われ、土地をあげたくなるのはむべなるかなである。それが将来に禍根を残すとは、与作校長とても神ならぬ身の知るよしもない。

たまたま子息の弟さんの方が、

大学教授も辞め、絵心もあつて、夫人ともども写生の旅に出られ、子供の頃に住んだことのある釧路市を訪れたのである。

わたくしが丹葉節郎先輩の命令で空港に出迎え、母校の胸像へ案内し珍家旅館に一泊させ、翌朝にジープで山越えして土地を教えたのである。

それが、まさか兄弟喧嘩の、孫にまで及ぶ家族の争いになるとはわたくしも思ひはしなかつた。

まさに維新の最大の功労者、西郷隆盛の遺訓にいう「児孫（じそん）のために美田（びでん）を買わず」である。

戦時中に、校舎近くの畠へ農作で生徒が働きに行ったことがある。

少し足を伸ばして遠矢方面まで遠足がてらに作業もした。

だが、戦争が激しくなつては、そんな子供の遊び程度のことでは許されなくなり、中学2年生でも白糠軍馬補充部へ牧草刈り、標茶にアマ草刈りなど泊りがけの作業となつたのである。

3年生になつては、布団を背負つて半年以上もの長期宿泊の作業

または農家援農や冬山造材へと行かされた。

敗戦の知らせもなく8月15日を過ぎた五日後に、馬車屋さんの「日本は負けたよ」の言葉に、「何いつてんだ!!我が神国は不滅だ。そんな非国民は殺してやる。兵隊さんも居るんだから、もう一度いつてみる!」といった案配。

なにしろ生まれてそれまで、軍国主義のおしえ、教育を受けて育てられた軍国少年である。

だが、我が神国日本が「神風」も吹かずに負けたのだつた。

帰郷後も鳥取町方面へ農家の手伝いでイモ掘りや牧草刈りに行かされた。その手間賃や農作物は学校や先生方に運ばれた。

兎狩りの獲物も同様である。収獲物がそのようだから、父兄から寄付になつた中学校林の所有登記がどのようになつているか、生徒たちは知るよしもなかつた。

同窓会の活動が活発になり、しかも同窓会館建設の問題も起こつたので、この山林売却による財政を提起をしたこともある。

しかし同窓会館の寄付集めの方

が焦燥の眉であつた。

いつになつたら売れるやも知れない学校林などにかかずらあつてはいられない。

話はそのまま放つて置かれ年月のみが過ぎたのである。

それにひきかえ旧制中学から新制高校となつた道内の各校は同窓会館をさつさと立ち上げ、札幌一中・現札幌南高校などは「六華同窓会」を財団法人となして、父兄からの森林その他の財産を同窓会自体が所有し、登記まで済ませて生徒の活動に役立てている。

こうして見てくると、阿部与作校長をはじめ恩師らの慈悲や同窓先輩らの愛情を在校生に及ぼすため同窓会を財団法人にすること。

ときたま釧中3回生・佐々木正雄氏の緑ヶ岡3丁目を寄付していただき、現校舎が建設されてスムーズに移行したが、今後のことも考えて早急な財団法人化を願いたいものだ。

いまなお続く釧中学校林の家族争いに終止符を打つ上でも、同窓会の英断を待つのである。

奥田 達也（湖陵1期）

事務局だより

●今年8月11日

本日に地球環境は言われるように温暖化現象なのでしょうが、いつもになく暖かい冬を過ごしておりますが、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

さて、お知らせであります。昨年18年の同窓会のおりに同窓会の開催時期を定例的に開催している8月の第2土曜日から変えることは出来ないだろうかとの申し出があり、会場でこの件に関してアンケート調査をさせていただきました。変えられないだろうかとの申し出の主旨は釧路管内以外の地方の方も参加人員が多くなるように、毎年と言うのではなく(定例のこの時期は、ややもするとお盆休暇にあたりチケットも割安がない上に入手が厳しい)一考頂けないだろうかとのご意見であります。同窓会に参加した方183名から回答を頂きましたので、その結果を記載します。アンケート調査は3分類にさせていただきます。

①釧路市及び釧路支庁管内在住者
144名の回答は、84名(58%)が現状維持、変更しても良いが43名。

②釧路市及び釧路支庁管内以外の在住者39名の回答は、29名(74%)が現状維持、変更が7名、ちなみに何月頃を希望しますかとの問いには4名の方が9月で、7月、11月、お盆以外が各1名でした。

③アンケート総数の183名の回答は、現状維持が113名(62%)、変更が50名となり、全体の傾向は60%以上の方が現状維持との結果になりました。

ちなみに道外からの参加者は、東京都内5人、神奈川3人、大阪、京都、岐阜、岩手、千葉、鳥取、さいたま、宮城が各1名、不明4名でした。北海道内は19名でした。栗林会長等とも相談した結果、19年度は現状通り第2土曜日の8月11日で開催をさせていただきます。

毎年の事ですが当番幹事期の方々には楽しい出会いにする為に運営資金の確保から懇親会の内容に至るまで大変な御苦労を掛けています。また同窓会のあり方に関しても年代間では考え方にかなりの開きがあるのが現実ですので、今後も役員会で開催時期等の案件も含めて同窓会活性化に向けての議論をしてまいりますのでご意見を頂ければ幸いです。

幹事長 島本幸一(湖陵19期)

ふるさと

旨い物あり

釧路地方には一つに絞り切れないほど旨い物があふれています。釧路を離れた同窓生の皆様、釧路訪問の折には是非ご堪能下さい。また、お取り寄せ下さい。ただし、季節限定品やメーカー向けもあり。

- 《魚介類》油子・イクラ寿司・ウニ・牡蛎・カジカ・魚醬・鯨刺し身・毛蟹・鮭・サンマ刺・柳葉魚・助宗・筋子・宗八鰯・鱈・鱈子・チカ・鱒・ババ鰯(地方名ナメタ鰯)・北寄貝・メヌケ・メメセン(和名キチジ)・柳鰯・柳ダコ・ワカサギ
- 《植物業》厚岸海苔・音別大路・釧路苺・釧路北限大根・釧路昆布・摩周蕎麦・摩周メロン・山ワサビ
- 《乳製品》アイスクリーム(ハーゲンダッツ、阿寒、厚岸、弟子屈)・チーズ(白糠町、厚岸町)
- 《肉》鯨・鹿・肉用乳牛・ラム
- 《郷土料理》熱々鉄板スパゲティ・東家系ソバ・飯寿司・釧路勝手井・釧路発祥ザンギ・刺身・白糠タコまんま・釧路ラーメン・ツブ焼き・握り寿司・炬燵焼き・砂糖付きフレンチドッグ
- 《酒類》釧路港町ビール・焼酎・高譚(全国のサークル・サンクスで)・地酒福司

田巻恒利(湖陵18期)

編集後記

道教育委員会は「道鳥タンチョウ」を毎年十二月と翌一月に三ヶ月所で生息数を調べています。が昨年度の調査の結果、千羽を越えたと発表した。生息地は釧路地方に止まらず根室・十勝・宗谷地方に広がり、そう言えば釧路を離れて車を運転して「オヤこんな所に鶴が」と驚いたことがある。釧路地方住民の長年に亙る給餌活動や保護活動の成果が「千羽鶴」となって現れ地元北海道の誇りだ。

私事で恐縮ですが越後国村上藩主の日記「松平大和守(直矩)自筆目録」に「(一六六六年)九月八日、松前(港)より到来の子飼の真鶴一番(つがい)新潟(港)藩年貢米蔵宿」田巻三郎兵衛所より迎えに遣わし」のくだりがあり



(写真、左より) 増子正樹、佐藤文昭、田巻恒利、波谷倫之、川端紀一、星匠

ます。蝦夷地のタンチョウが瑞鳥として昔から珍重され全国に知られていたことが判る。

さて、会報くまざさの新しい編集委員として川端紀一氏(湖陵十一期)をご紹介します。川端さんは湖陵同窓会を大きく支える釧路教職員湖陵会の第十八代会長として活躍されました。その力量にご期待下さい。



田巻恒利(湖陵18期)

釧路湖陵高校

〒0851-0814
釧路市緑ヶ岡3丁目1番
TEL(0154)43-1313
ホームページ
<http://kushiro-koryu.jp/infoseek.co.jp/>

くまざさ編集委員会

- 同窓会会長 栗林延次(湖陵17期)
- 同窓会幹事長 島本幸一(湖陵19期)
- 同窓会会計長 佐藤文昭(湖陵22期)
- 編集委員長 星匠(湖陵30期)
- 編集委員 川端紀一(湖陵11期)
- 編集委員 増子正樹(湖陵20期)
- 編集委員 波谷倫之(湖陵26期)
- 編集事務局長 田巻恒利(湖陵18期)

くまざさ編集委員会

〒0851-0014
釧路市末広町2丁目4番地
TEL0154(23)0241
手動切替FAX 0154(23)0242